

沖縄歴史の散歩道



◆墓を巡る④

琉球史研究家の上里隆史氏が沖縄の歴史文化の魅力を本誌上で連載しています。



オランダ墓（名護市 屋我地島）

戦争の戦死者も多数葬られています。なぜこの地に外人墓地が置かれたのでしょうか。実はこれには歴史的な理由があります。王国時代、泊は外国人の滞在地区で、近隣にあつた聖現寺が外国漂着民の収容センターとなっていたため、そこで亡くなつた者が葬られたのがきっかけとなつています。

沖縄北部の運天港の対岸に位置する屋我地島にも外国人墓の「オランダ墓」があります。オランダという

諸外国とさまざまなかつての交流のあつた沖縄では、沖縄の人々以外の墓も存在しています。有名なのは泊の外人墓地。沖縄で亡くなつた外国人専用の墓地で、300基あまりの墓が並んでいます。琉球王国時代から存在していて、最古は1718年の中国人のもので、宜野湾に漂着して死去した人物です。そのほかペリー艦隊の従者や明治時代のアメリカ人英語教師などの墓もあります。この墓地は現在も利用されていて、ベトナム

江戸時代の日本からの船もしばしば琉球で漂着・遭難しています。浜比嘉島（うるま市）のヤマトウンチュー（大和人）墓は1839年茨城の水戸藩の船がこの地に流れ着き、救助により亡くなつた5名が葬られ、墓石が今でも残されています。当時の船は木造船であつたため、悪天候などにより漂流が頻発していました。生存者は王府の手によつて故郷へ帰されましたが、無念にも客死した者は沖縄で埋葬されることになつたのです。



ヤマトウンチュー墓
(うるま市 浜比嘉島)

近世、琉球に滯在していた薩摩藩の在番奉行のスタッフが葬られたのが那霸・若狭町の大和人墓地でした。広巖寺の境内にあつたこの墓地には日本風の石塔墓が並んでおり、現存はしていませんが明治初年の絵図にはその姿が描かれています。沖縄とは思えない異国空間がかつて那霸に広がっていたわけです。



『沖縄志』中の大和人墓地（那霸・若狭町） 琉球大学附属図書館所蔵

上里 隆史
(うえざと・たかし)



琉球史研究家。内閣府地域活性化伝道師。法政大学沖縄文化研究所研究員。早稲田大学大学院修士課程修了。著書に『琉球という国があった』(福音館書店、2020年)、『海の王国・琉球』(ボーダーインク、2018年)、『マンガ沖縄・琉球の歴史』(河出書房新社、2016年)、『尚氏と首里城』(吉川弘文館、2015年)など。NHKドラマ「テンペスト」時代考証や、NHK「プラタモリ」案内人などメディアでも活躍。